

Press Release(H26/10/21)

本学医学部・三好准教授の研究グループの成果が、 第20回日本アルコール・薬物医学会優秀論文賞を受賞

【受賞研究のポイント】

- ・モニタリング調査データの利点を生かして、高校生におけるクラブ活動および運動の実態、クラブ活動と薬物乱用との関連性、運動と薬物乱用との関連性を示した。
- ・モニタリング調査から得られるデータの利点欠点を示した。

【受賞内容】

平成26年10月3日、本学医学系研究科・医学部看護学科 地域・精神看護学 三好美浩 准教授の研究成果が、第20回日本アルコール・薬物医学会優秀論文賞を受賞しました。受賞論文は「全国高校生におけるクラブ活動および運動と喫煙・飲酒・薬物乱用との関連—2004, 2006, 2009年JSPAD調査のボンド・サンプルの結果—」です。

日本アルコール・薬物医学会は、臨床医学、基礎医学、社会医学その他関連分野の協力のもとに、アルコール及び薬物依存に関する研究の進歩並びに知識の普及、情報の提供等をはかり、もって学術、文化の発展に寄与することを目的としています。同学会は、機関誌『日本アルコール・薬物医学会雑誌』（ISSN 1341-8963）を年6回発行し、年一回、機関誌掲載論文より学会優秀論文賞を授与しています。

日本アルコール・薬物医学会：1965年11月に設立。日本学術会議協力学術研究団体。会員数666名。

【受賞研究の概要】

米国では、2008年にNational Institute on Drug Abuse (NIDA)は、薬物乱用防止における運動の役割に関する研究を推奨し、広く研究者に呼びかけました。これらの動向を踏まえ、本論文は、日本の高校生におけるクラブ活動（部活動）への参加および運動の実態と、たばこ、酒、大麻の生涯および1年経験との関連性についてより詳細に分析しました。分析には、2004年、2006年、2009年に全国の全日制高等学校

の生徒を対象に実施された3回のJapanese School Survey Project on Alcohol and Other Drugs (JSPAD)調査のデータを結合した75,726名のボンド・サンプルを使用しました。先行研究で示唆されたように、本論文においてもクラブ活動に参加している高校生ほど、喫煙・飲酒・大麻乱用の経験率が下がるという負の関連性がみられました。さらに、ロジスティック回帰分析を用いて、たばこ、酒、大麻の経験率を、クラブ活動への参加、運動、性別、学年という四つの変数から予測した結果では、

- (1) クラブ活動への参加および性別がより大きく寄与する一方で、運動が最も寄与しなかったこと
- (2) 高校生に多様な運動機会がみられること
- (3) クラブ活動に積極的に参加する高校生に、学年が上がるほど飲酒の経験率が上がるという大きな学年効果の関連性がみられること

を発見しました。そのため、日本の高校生における薬物乱用では、運動よりもクラブ活動への参加の重要性が高いことを確認しました。補足すると、高校1年生ではクラブ活動に参加する程度が飲酒の経験率の差異に表れていますが、高校3年生ではその差異が小さくなります。先行研究で見えていた喫煙・飲酒・薬物乱用とクラブ活動への参加との関連性は、本論文の分析により、クラブ活動に積極的に参加する高校生における飲酒に、特に大きな学年効果がみられるという一層深い理解を得ることができました。そして、クラブ活動(部活)に参加することは、勝利や目標を目指すこと以外にも高校生の生活に良い効果を及ぼしている面もあることが分かりました。

日本の高校生における喫煙・飲酒・薬物乱用の1次予防(薬物に手を染めさせないこと)を考えていく際、クラブ活動(部活)の参加による集団活動への帰属、あるいは生活時間配分が有効な観点であるといえます。

【受賞論文】

論文タイトル：全国高校生におけるクラブ活動および運動と喫煙・飲酒・薬物乱用との関連—2004, 2006, 2009年JSPAD調査のボンド・サンプルの結果—

掲載雑誌：日本アルコール・薬物医学会雑誌

掲載日：2013年(第48巻6号)

【本件に関する問い合わせ先】

岐阜大学医学系研究科・医学部看護学科

氏名：三好美浩

電話：058-293-3237(直通)

E-mail：ymiyoshi@gifu-u.ac.jp